

春の別れ

土田龍太郎

さまで親しきあはひならで、ただよそ目にうち見るほどよりも、かたちありさまきはだち心ばえまたにくからねば、あながちに戀ふるまでのことこそなけれ、いかでいささかにも睦びてしがなと思ひかけし人ありたり。

かく願ふうちに、さるべきゆかりたえてなかりしにもあらず、をりをりにあひ向ひても言ふたよりいできたり。その人そこにはいかが思ひあたりけむ、今も定かならねど、わが心なしにてもやありけむ、われにはつれなからぬけはひなきにしもあらねば、やうやくたのもしきにそへて心おごりさへせられぬるうちにはかなく日月過ぎゆきたり。

さるほどにいかがしたりけむ、去年こぞの秋の半ばよりあひ見ることまればちになりゆきて、年代りて後はせうそこふつに絶えたり。もしあだし男とたづさへて逃れ行きしにあらざやもはかりがたければいぶかしきことよなし。とてもかくてもやうこそあらめ、いかでことよし尋ねてしがなと思へど手だてさらになければ、いかにともせむすべ知らにわびみたるほかなかりしなり。

かかりしところに、かの人なにとやらむ祕めたる仔細ありてひそかに異國とつにに旅立ちぬと告ぐるものありたり。かかるべしとはかけても思ひよらざりければあさましきこといふべくもあらず。夕空に出でしばかりの春の月のにはかに雲隠れぬるにもたれば、欺かれぬる心地さへそひたるぞあいなき。

暮れゆく春は空のかなたにさかりても月日経ば歸りもこそすべけれ、わが思ふ人とはこの別れなりやいなや、はたおのづから年たけれ同じ人にめぐりあはむをりさらになかるまじきにもあらず、もとよりも宿世すくせつたなきわが身なればかの人との縁縁しさへさまで深からざりしなるべし、さればやがて思ひ絶えてやみなむぞなかないさぎよからまし。かにかくに思ひ亂るることはてもなくて、わが魂たまは暮れゆく春のあととめてあくがれゆくがにさすらひてほとほと消えいらむばかりなれば、ものぐるほしきこといふはかりなし。

おほかたの春の別れをしけれどやがて歸らぬ人をしぞ思ふ

(令和三年十一月二十四日受附)